
蒼いラピンス : 番外編

水樹裕

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

蒼いラビリンス : 番外編

【Nコード】

N3503A

【作者名】

水樹裕

【あらすじ】

二十九歳の柏木浩介は、自分の研究のままならない現状に疑問を感じ始めていた。そんな時、「研究所に來ないか？」と、恩師に誘われて。「蒼いラビリンス・番外編」

蒼いラビリンス : 番外編

所長 1 「再会」

「自分が所長をしている研究所に来ないか？」

大学時代に世話になった恩師から、そう誘いがあったのは、夏も終わりがけた九月も後半。

ちょうど柏木浩介かしわきこうすけが、自分の仕事に疑問を持ち始めていた時だった。

その頃彼は、とある大学病院で外科医をする傍ら、大学の講師として教鞭を執っていた。

もちろん、自分の研究も続けてはいたが、勤務医と大学の講師、その隙間を縫っての研究では、『何もやっていないよりはまし』と言った程度だったのだ。

生活の為には、どちらも辞める訳にはいかなかった。
だから、この申し出は願ってもない事ではあったのだ……。

「お久しぶりですきめがさ衣笠教授。……少し痩せられましたか？」

そこは、日掛生物研究所の来客用の応接室であるようだった。
浩介こうすけがそこを訪れた時、懐かし気に目を細めてその老教授は破願した。

「良く来てくれたね、柏木君かしわき。元気そうぞ何よりだよ」

「……二十九、ですが？」

自分の年齢と、今の話と何の繋がりがあるのだろうか？

「そうか、付き合っている女性はいないのかね？」

ますます脈絡がなくなってきた。質問に、教授の真意を測りかねてしまう。

「……いせんが？」

今まで、女性との付き合いがなかったとは言わないが、如何せん仕事柄『そんな暇がなかった』のだ。いやむしろ、『そんな暇があったら、研究に当てていた』はずだ。

「ははははは。君は相変わらずだねえ」

何故か嬉しそうに言う彼に、浩介は思いの丈をぶつけた。

「笑っておられる場合ですか？ 治療はちゃんとなさってるんでしようね？ これでも、外科医の端くれです。私で良ければ、治療に参加させてください」

矢継ぎ早に問い掛ける浩介に、笑顔のまま衣笠は穏やかに呟いた。

「治療は、もう余り意味がないんだよ。もう、すでに末期だね。……まあ、”医者の不養生” って奴の見本だね。”因果応報” の方が当たっているかもしれないが……」

今までとは違う、どこか自嘲気味なその笑いに、彼の心の奥底にある物を垣間見た気がして、浩介は何も言えなくなってしまうた。

蒼いラビリンス : 番外編

所長 2 「少女達」

その部屋はまるで、幼稚園か託児所かと見まがうほど、雑多なオモチャや遊具、絵本といった物の山だった。

その中程に、保母らしき中年の女性が一人と二人の少女。
いやむしろ『幼女』と言った方が良い幼い子供が、仲良く遊んでいた。

五、六才位だろうか、ひときわ目を引くのは、その二人の容貌だ。漆黒の髪と、金色にも見える色素の薄い茶色の、腰まで伸びた長い髪。

抜けるように白い肌。
そして何より、その子供達は、全くと言って良いほど同じ顔をしていたのだ。

髪の色が同じであれば、おそらくは見分けなど付かないだろう。

まるで、色見本だな……。

妙な感心の仕方をしながら浩介は、ここまで案内をして来た衣笠きぬがさに尋ねる。

「ここは、職員の託児所何かですか？」

至極まともな浩介の質問に、衣笠が答えようとした時、二人の少女がこちらに気付いた。

「あつ、先生！」

満面の笑みを浮かべ、まるで小犬のようにじゃれ合いながら、走

り寄って来る。

「衣笠先生、さっきね、前田さんに”あやとり”おそわったのよ！」

そう言って黒髪の少女が、小さな手に絡んだ赤い毛糸を掲げて見せた。

「そうか、それはよかったね」

子供達の目線に会わせて、かがみ込みながら、衣笠が穏やかに笑う。

そして、少女達の頭を代わる代わる、くしゃくしゃとかがき回した。

「この、おじちゃん、だあれ？」

茶色の髪の少女の問いに、浩介は思わず口に運んだコーヒーを吹き出しそうになった。

……そうか、この子達から見れば、自分は立派な”おじちゃん”なんだな……。

まあ、無理もないか。この位の子供がいてもおかしくはない年齢なのだから。

「ははははっ」

引きつり笑いをする浩介の様子を、日本茶をすすりながら見ていた衣笠が、愉快そうに笑った。

どつという訳か、先程の子供達と『三時のおやつ』のテーブルを囲んでの事である。

六人掛けの丸テーブルの上に、保母の前田さんの手作りだという、クッキーやらお菓子やらがカラフルに並んでいる。

浩介はコーヒーを貰い、前田さんと子供達はオレンジジュースを飲んでいた。

「藍ちゃん、せめて”お兄さん”って呼んであげなさいね。この人はまだ、独身なんだからね」

衣笠がそう言って、コホンと一つ咳払いをする。

「この人は、柏木浩介先生。君達の”新しい先生”だよ」

その言葉に、二人の少女が驚いて顔を見合わせる。

「じゃあ、衣笠先生は!?!」

「どこが行っちゃうの!?!」

まるで申し合わせたかのように、面白いようにハモる。

「衣笠先生はね、ずっとお休み無しでお仕事していたからね。ちょっとまとめて、お休みを貰う事にしたんだよ」

「あの二人の相似性を、どう思う?」

場所を移した、衣笠個人の部屋での彼の最初の言葉である。

そこは、「簡素な」と言って良いほど、余分な物が何もない部屋だった。

その二十畳の洋間が居間兼書斎で、もう一間十二畳の寝室があるだけだと言う。

入り口を入った正面の窓際に、大きめのデスク。

その手前に応接セットがあり、壁面のほとんどは本で埋まっていた。

まあ、自分の部屋と、似たり寄ったりだな。

衣笠に促されて、ブラウンのレザー製のソファに向かい合っている。

「相似性って、一卵性の双子じゃないんですか？ 多少の色素変位があるようですが」

あそこまで似ていて、普通の姉妹という事はないだろうと思った。

「……彼女たちは、姉妹ですらないんだよ。年齢差は、五ヶ月だ」

一瞬浩介には、衣笠の言葉の意味が分からなかった。

姉妹ではない、瓜二つな年齢が五ヶ月差の少女達？

まさか。

柏木の脳裏に、一つの仮説が浮かんだ。

衣笠の研究テーマは、”動植物におけるクローン技術”

「教授！？まさか、あの子供達は……」
クローンではないのかという言葉を読み込む。

そんなはずはない。

植物実験ならともかく、動物実験でのクローンが成功したなんて話は聞いたことがない。

まして、『人間のクローン』だ。

それは、技術的にも、倫理的にも、不可能であるはずだった。

「あの黒髪の少女が、『日掛藍』^{ひかけあい}」

この日掛生物研究所、いや、日掛グループ会長、日掛源一郎の孫娘で、唯一の後継者だ。

そして、茶色の髪の少女が、私たちは『大沼藍』^{おおぬまあい}と呼んでいるが、彼女は日掛藍が五ヶ月の胎児だった時に作られた、クローン体だ」

「……まさか、そんな事が……」

浩介は、教授の余りにも衝撃的な告白に、言葉が見つからなかった。

衣笠の性格から言って、進んで人体実験をするとは、到底思えなかった。

黙り込んでしまった浩介に、追い打ちを掛けるような言葉が続く。

「大沼藍は、日掛藍の『臓器移植』の為に、私が作ったクローン人間だ」

蒼いラビリンス : 番外編

そう言つと、衣笠は黙り込んだ。
。

所長 3 「禁断の研究」

客室を与えられて、そこに泊まることになった浩介は、ソファ―に座り込んだまま身じろぎもせず、ただひたすら衣笠の言葉を反芻していた。

つまり、こう言う事か。

私は、ここ日掛生物研究所に、病床の衣笠所長の後任として呼ばれた。

その仕事の内容は、表向きは日掛グループ・バイオ部門の研究施設、「日掛生物研究所」の所長。

だが、実際は、日掛「藍」の、彼女は先天性の内臓疾患を持っていて、何もしなければ、恐らく二十才までは生きられない……。

彼女のクローン体「大沼 藍」を使っの、臓器移植プロジェクトの総責任者。

「今はまだ、あの子達は幼すぎて、臓器移植の時期としては、早過ぎる。源一郎には、彼は私の幼なじみでもあるんだが……そう言っである。実際、そう言う側面もあるんだが、本当は、私がやりたく無いんだよ……」

本当ならクローン体は、あくまで臓器保存用の器として、実験施設の中で管理していればいい。

名前など付ける必要も、人間として教育する必要もない。

だが、産まれて来た命を目前にした時、自分にはどうしてもそれが出来なかったのだと、そう言って衣笠は力無く笑った。

「どうして、私だったのですか？ 移植手術の為と言うなら、いくらでも優秀な医者がいたでしょうに……」

柏木は、素直に浮かんだ疑問をぶつけてみた。

金の為なら、倫理感も良心も売り渡す様な人間はいくらでもいるだろう……。自分は、そういう人間だと思われたのだろうか？

「柏木君、君は私が知っている中では、最高の外科医だよ……。しかし、私の目的はむしろ、君の研究の方にあるんだよ」

「研究って、”動植物における生体冷凍保存”ですか……？ それと、臓器移植と何の関係が……」

浩介は、一つの可能性を思いついて、まさかと思いつつも口に出した。

「まさか教授は彼女を、コールドスリープさせるおつもりですか？」

少しの沈黙の後、衣笠が静かに口を開く。

「一つの、選択肢だと思っているよ」

浩介にはそれが「唯一の選択肢」だと、そう言っているように聞こえた。

驚いた顔をしていたな……。

衣笠は、先刻の柏木の表情を思い出していた。

「…当然の反応だな……」
力なく呟く。

柏木浩介は、自分の教え子だった学生の時分から、ある意味目立った存在だった。

多くの学生の中で何故こうも、自分の関心を引くのか……。
もちろん、その成績は群を抜いて優秀だった。
しかし何より、

「あの不器用さ……私によく似ている」
クスリと笑いがもれる。

頭は抜群に良いのに、その処世術の不器用さと言ったら、天然記念物並なのだ。

クールだの、無表情だの、何を考えているのか分からないだの、他の学生や教職員から聞こえて来る彼の評価は、余りかんばんしい物ではなかった。

「勉強熱心な、単に不器用な、自分の若い頃によく似た青年」

もし、息子がいれば、こんな感じだろうか？

できれば、こんな事には巻き込みたくはなかった。

これは、もう倫理がどうのと言う問題ではなく、立派な犯罪行為なのだから。

しかし、自分にはもう残された時間がなかった。

それを自覚した時浮かんだのは唯一、柏木浩介のあの生真面目な顔だけだったのである。

六年前、幼なじみの日掛 源一郎から連絡があったのは、長年連れ添った妻を病気で亡くし、まるで抜け殻のようになっていた時だった。

「孫を助けて欲しい」

源一郎の願いに、医者でありながら、妻の病には無力だった自分にも救える命がある……。

いや、むしろ何かに没頭していただけだったのかもしれない。一も二も無く、彼の申し入れを受け、勤めていた大学を辞め、この研究所にやって来た。

日掛グループの、無限とも言える資金力を得た上の研究の成果は、目覚ましい物があった。

そして、クローン実験の成功。

「…正気の沙汰ではないな……」

”マッド・サイエンティスト”

まさに自分は、「悪魔に魂を売った狂った科学者」に他ならない。

苦い自覚が、病み衰えた痩せたその身体を支配していた。

所長 4 「別れ」 最終話

翌日、一睡も出来ずに考えた末、浩介は、衣笠の申し入れを受けることにした。

それを伝えた時、衣笠は嬉しいと言うよりは、何故か、申し訳なさそうな複雑な表情を見せた。

「ありがとう、恩に着るよ」

そう言うと、深々と頭を下げる。

「やめて下さい！ さあ、頭を上げて」

頭を下げたままの衣笠の背に手を当てた浩介は、その余りの細さに、衣笠の病状が末期状態であること悟らざるを得なかった。

「ただし、ひとつ条件があります。ちゃんと治療を受けること。もし、それを聞いて下さらないのなら、この話はお受けすることはできません。いいですか？ 私はあくまで、教授が留守の間の代理の所長です。病気をきちんと治して、早く戻って来て頂かないと、困りますからね」

そうきっぱり言う浩介に衣笠は、例の「悪戯を咎められた子供のよな顔」をして

「はい、分かりました先生」

右手をちよっと挙げて、おどけて見せた。

衣笠から、所長の職を引き継いだ四ヶ月後の翌年二月、彼は帰らぬ人となった。

何度か見舞いに行った病室のベッドの上で、彼は浩介に語ったものである。

「実はね、源一郎の亡くなったカミさんって言うのはね、私の初恋の人でね。その人を、彼と争って、負けたんだよ」

懐かしむように遠くを見る目に、今はもう、悟ったような穏やかな表情しか浮かんでいなかった。

「あの子供達は、彼女に良く似ているよ……。存外、私はロマンチストでね」

そう言って、やはり穏やかに笑っていた。

あの笑顔が、今も浩介の脳裏に焼き付いて離れない。

衣笠の訃報を聞いたその日、一日の仕事を終えた浩介は、珍しく時間通りに自室に戻った。

その部屋を浩介は、衣笠が使っていた時のそのままの手を入れないう状態で、使っていた。

白衣をソファアの背に脱ぎ捨てると、そこに座り込む。

疲れていた。
身体がではない、心が。

自分が他人の死にこんなにショックを受けるとは、浩介は思いもよらなかった。

外科医と言う職業柄、患者の死に立ち会う事は、別に珍しいことではなかったのだ。

十八の時、自分の母親が交通事故で死んだ時だって、こんな気持ちにはならなかった。

「お前は、冷たい人間だな……」
そう言ったのは、父親だったか。

”酒を飲みたい” 初めてそう思った。
こういう時人は酒を欲する物らしい。

「一番大きな本棚の右上の棚の奥に、とっておきのお酒があるから、良かったら飲んでね」

いつかの衣笠の言葉を思い出して、そこを探してみる。

ウイスキーのボトルが出て来た。

それを手に取ると、指先が何か小さな紙の様な物に触れた。
ボトルの裏側に小さなメモが貼り付けてある。

『柏木君。余り、飲み過ぎないように』

そう書かれてあった。

そしてその言葉の下に、衣笠の似顔絵が描いてある。

細長い顔にもじゃもじゃ頭、そして目尻の人の良さそうな笑いじわ。

それは、学生時代レポートの採点と共に良く描かれていた見覚えのある物だった。

「……また、あの人は、こう言う……」

子供のような所のある、ユニークな人だった。

余り激する事のない穏やかな、人を包み込むような優しい不思議なオーラを持った人。

目頭が熱くなる。

流れ落ちる物は、もっと熱かった。

自分は、こんなにもあの人を好いていたのか。

トントーン！

ノックの音と共にドアが開いた。

浩介は驚いて振り返る。

そこには、彼よりも驚いた顔をした「二人の藍」が立っていた。

「先生！？ どうしたの！？ どこか痛い！？」

音声多重放送のような二人の声が響く。

「いや、何でもないよ。大丈夫。ちょっと、目にゴミが入っただけだよ。どうしたんだい？」

ボトルを棚に戻し、二人をソファーに座らせる。

「二人だけで来たのかい？ 前田さんが心配するだろう？」

「大丈夫よ！ ちゃんと行って来たから！」

ね、とニコニコしながら、二人の藍は顔を見合わせる。

「はい、先生！ これプレゼント！」

そう言っつて二人で一つの、可愛くラッピングされた小さな包みを差し出した。

プレゼント？ 今日は何かの日だったろうか？

「開けてみてもいいかい？」 そう断つて包みを開ける。

出てきたのは、手作りらしい、ハート形のチョコレートだった。

「は、……………」

思わず笑いがもれる。

「そうか、今日は 二月十四日 ”バレンタインデー” って 奴か……………」

「ありがとう、嬉しいよ。先生、初めてもらったよ」

浩介は、二人の頭を代わる代わる、くしゃくしゃとかき回す。

衣笠が、何故いつもこうしていたのか分かった気がした。

「一緒に食べようか？」

「うん！」

満面の笑みを浮かべる、二人の幼い藍達を見詰めながら、浩介は心の中で呟いた。

教授、あなたの残した物は、私が守って行きます。
心配なさらずに、ゆっくり休んで下さい。

あのいたずらっ子のようなおどけた目をして、衣笠が、笑っているような気がした。

おわり

所長 4 「別れ」 最終話（後書き）

皆さんこんにちは。

蒼いラビリンスの番外編「所長」。全4話完結です。

何故「柏木浩介」が主人公の「拓郎」を差し置いて主役を張っているのかと言うと……。

単に、私のタイプだからです。（笑）

ここには、のんびりと番外編を単発で、更新して行きたいと思いません。

お付き合い下さると、嬉しいです。

短編：告白

「……今、何と言った？」

私は、今耳にした言葉の意味が、分かりかねて、思わず聞き返した。

いや、意味は、分かると思う。

何を考えて言っているのかが、理解できなかったのだ……。

「先生の子供が産みたいから、ご協力、宜しく願いします！」

藍が、妙に明るい表情で、余りにあっけらかんと言うので、「ああ、そうか、わかったよ」と、思わず答えそうになって、思いとどまる。

「何を、又、突拍子もないことを……」

私は、頭を抱えてしまった

日掛 藍、十八才。彼女は、「生粋のお嬢様」だ。

何せ、私が所長をしているこの「日掛生物研究所」を所有している天下の「日掛コグループ会長の孫娘」にして、「唯一の後継者」なのだから。

勝ち気で、気位が高く、我が儘で、……そして優しい娘だ。

それは、私が一番良く知っている。
五才の時から十三年間、この研究所で私が育てて来たような物なのだから。

「別に、問題はないでしょう？」

お祖父様だつて、ひ孫が出来るんだから、大喜びよ。

先生、私の事好きでしょ？

私は、元々先生が好きなんだから、何の問題もないわ
何か、おかしい？」

おかしい？ と真顔で聞かれても……。

「…おかしくは、ないが……」

それが問題なんだ。

彼女の言う通り、私はこの二十以上も年下の娘に、どうも「男として、惚れている」らしい……。

”らしい” というのは、自分でもこの感情が、父親が娘に対するような、肉親の情なのか、恋人に対する恋愛感情なのか、今一つはつきりしないからだ。

いい年をして、情けないとは思つが、人には得手不得手と言う物があるのだ。

大好き、大好きと言われ続けているうちに、その気になった物なのか……。

自分でも分からない。

ただ、愛しいと思う。

この娘の為なら、何を犠牲にしても惜しくはないと、そう思う。

それが、どんな非人道的な事でも、自分は迷わずするだろう

「もちろん、私がお腹を痛めて産んであげられる訳じゃないけど…」

先生は、迷惑？

私との子供なんかじゃ、嫌？」

迷いのない真っ直ぐな瞳が、少しだけ陰る。

「いや、そんな事はないよ」

そうだな、それも悪くはないかもしれない。

彼女は近々、長い眠りに付く。

彼女には今の医療技術では治療不可能な、先天性の内臓疾患があり、このまま何もせずにいれば、あと数年の命なのだ。

「コールド・スリープ」

いわゆる、人工冬眠のような物だ。

未来の医療技術の進歩に望みを繋いでの、今できうる唯一の選択肢。

「まるで眠り姫みたいね」

コールドスリープに入らざるおえない自分の運命など物ともせず、
彼女はそう言って笑った。

その笑顔を、守りたい

「分かったよ。そうしよう。協力するよ」

彼女が、満面の笑みを浮かべる。

「ありがとう！先生！大好きよ！」

そう言つと背伸びをして、私の首にぶら下がるように、抱き付く。

そして右頬にキスをした。

終業後、所長室での一コマである。

今の自分は、さぞ締めりのないニヤケた顔をしているだろう。

部下には、死んでも見せられないぞ……。

蒼いラビリンス : 番外編

私は心の中で呟いた。

おしまい

短編：決意

私は、今まで自分が特別だなんて思っていないかった。

パパもママも、私が小さい頃、飛行機の墜落事故で死んでしまった。

だから、私には、パパに肩車された記憶も、ママに抱き締められた記憶もない。

でも、それを寂しいと思ったことは無かった。

だって、私には大好きな「妹」がいた。

大好きな、「おじいさま」がいた。

お母さんのような、優しい世話係の「前田さん」がいた。

そして、大好きな、「柏木先生」がいた

研究所で暮らす私と妹にとっては前田さんが、「お母さん」

料理も、お裁縫も、ついに行儀見習いも、ホントは「ママ」に教わるはずだった事を、たくさんたくさん教えてくれた。

最初に教わった料理は、バレンタインで柏木先生にプレゼントした「ハートのチョコレート」！

あれは、柏木先生がこの研究所に来た最初のバレンタインデー。

私も妹も、まだ5歳。

はつきり言って、おままごとの延長だった。

全身チョコレートまみれになってやっと出来上がったときには、もう先生は仕事を終えて自分の部屋に戻ってしまっていた。

「先生、今日はお仕事早く終わったの？いつも、」藍たちがおやすみするまで、お仕事だ” って言ってるのに……」

そう言う私たちに、前田さんは、ちよつと哀しい顔をして、

「藍ちゃん達。このチヨコレート、柏木先生に、お部屋まで持って行ってあげなさい」と言った。

「えっ？いいのー？ いつもは”お部屋には、行っちゃダメ”って……」

「今日は、良いのよ。せつか頑張って作ったんですもの。行ったらっしゅい」

「お部屋に入るときは、ノックをするのよ」

「は〜い！」

そして、前田さんに言われた通り、私と妹は、「ノックをして先生の部屋に入った。

ただ、ノックをしただけで、返事を待たなかったけれど。

だって、まだ5歳だったんだもの。

がちやり。

開けたドアの向こうには、大きな本棚の前で何かビンのようなモノを握りしめて、先生が、泣いていた

いつも優しい先生が、泣いていた

「ゴミが入っただけだよ」

そう先生は言っただけ、あれはうそ。

先生は、泣いていた。

後で前田さんにそのことを伝えると、

「柏木先生の、先生が亡くなったの。ええとね。死んでしまったのよ」 そう教えてくれた。

「死んでしまった？」

幼い私たちには、まだ「死」というモノがなんなのか、良く分かっていなかった。

「大好きな人が、もう会えない遠い所に行ってしまって、先生は悲しかったのよ。人はね、そう言うとき、悲しくて泣いてしまうものなのよ」

私と妹は、前田さんの話に、わんわん泣いてしまった。

「大好きな人に、もう会えない」

その言葉が、幼心にとてもショックだったから。

今にして思えば、あれがきっかけだったのかも知れない。

私は、先生のあの涙を見て、先生を好きになったんだと思う。

5歳の初恋。

その気持ちは、18歳になった今も変わらない。

先生は、私にとっては、一番大切な人。

例え、自分が不治の病で二十歳まで生きられなくても、妹が、実は私の臓器移植用にられたクローンでも。

私が「生きたい」と言えば、多分先生は迷うことなく、妹からの臓器移植をするだろう

そして、そのことに一生苦しむ。

それが分かっているから。

コールド・スリープなんかしたくない。

このまま死んでも、最後まで先生と一緒にいたい。

そう言えば、きっと先生は苦しむ。

きっと。

だから私は、笑うんだ。

「まるで、眠り姫みたいね。ロマンチックで素敵ね」

それは、私の精一杯の強がり。

私を「好き」と言ってくれた、先生の為に。

大人だけど、不器用な先生の為に。

大好きな、先生の為に。

蒼いラビリンス : 番外編

私は、
強くなる。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3503a/>

蒼いラビリンス : 番外編

2009年5月31日21時15分発行